
VISITOR

響かほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VISITOR

【Zコード】

Z3500Y

【作者名】

響かほり

【あらすじ】

幼馴染で家がお隣同士の天羽香あもうかおりと、皆本祐みなもとたすく。俺様な祐にいつも振り回される香は、いつものようにバイト帰りの祐の為に夕食を用意して待っていた。けれど、時間になつても帰つてこない幼馴染。その彼から電話がかかってくるが…

高校生の香を突如、襲う恐怖を描いたスプラッター系ホラーの『VISITOR』と、その後日談を書いたホラーは設定だけな祐視点のラブコメ『俺様ゾンビはお墓迦がお好き』の一編を収納予定。

VISITOR 1(前書き)

「Jのお話（VISITOR）は、スプラッター系ホラーで、些か残酷な描写が過ぎます。

VISITOR1を読んで、これは駄目だと思われる方、想像力豊かでスプラッターが苦手な方、申し訳ございませんが速やかにBACKをお願いします。

VISITOR2はスプラッターやホラー映画がバツチ来いな御方のみ、お進みください。

尚、VISITORを読まれなくとも、『俺様』のSTORYには一切、差し支えございません。

鼻歌を歌いながら、天羽香^{あわひかお}は火にかけたシチューをおたまで焦げないようにかき回す。

「…それにしても遅いなあ、祐^{たすべ}」

幼馴染で、同じアパートの隣に住んでいる皆本祐^{みなもと}が約束の時間になつても来ないので、香は思わず呟いていた。

香は母子家庭、祐は父子家庭。お互^よいに片親で、隣同士だから小さい頃はよく夜勤の仕事で親が留守になることが多い互いの家の都合もあつて、どちらかの親が居ない日は、一緒に食事をするようになつた。

それが小学二年生の時で、高校一年生の今に至るまで続いている。奇しくも、高校も同じ所に通っている祐の弁を引用すれば、『飯の準備が面倒くさいから、毎日俺の為に用意しやがれ』。

イケメンは性格が悪いと、香は常に思う。

最近は、両親の不在を問わずに毎日食べにくるどころか、昼の弁当まで要求する凶々しい幼馴染の所為で、祐のファンと言う女子たちに、香は学校でねちねちとした嫌味や嫌がらせを受けている。

“どんな俺様よ、あいつ…何時か』の的にしてやる”

と、素直に料理を作りながら香がいつも思つているのは、祐には秘密だ。

そうは思つても、約束した時間には必ず戻つて来る相手が、三十分も帰りが遅くなることはなかつたので、流石に心配にはなる。

三十分ほど前には、異様な台数の緊急車両のサイレンが遠くから鳴り続けていたので、余計に。

ガスの火を止めて、携帯電話を取り出した香は、祐の携帯電話ナンバーを着信履歴から見つける。コールボタンを押そうとした瞬間、タイミング良く相手から電話が鳴る。

一瞬びくつとなった香だが、気を取り直して電話に出る。

「もしもしし？ 今何時だと思つてる訳？」

開口一番、可愛げもなく相手に言い放つたが、相手側はしばらく無言だった。

「…祐？」

『力オリ…ミツケタ』

それは、幼馴染ではない知らない女の声。それも、喉が潰れた呻き声の様な声。

粘着質で獵奇じみた不快感を煽るそれに香は、異常性を感じて背筋が凍る。

『…オマエ…、コロオス』

思わず香は震える手で通話を切つた。喉がカラカラに干上がつて、上手く息もできない。

悪戯にしては性質の悪い冗談。そして、香はこの手の冗談が最も怖くて嫌いだった。

「うう…祐の奴…」、こんな悪戯して…絶対許さないっ！」

怒りながらも、恐怖で震えが止まらない香の耳に、鍵が開いて扉

が開く音が届く。

位置的に祐の家だと気付いた香は、そつと玄関を開いて右隣の幼馴染の家を見る。

が、其処を見て香は眩暈を覚えた。

生臭い匂いと共に目に入つた隣の家の半開きの玄関先には、夥しい血の痕。真新しいそれは、ドアノブにも玄関の扉にも擦り付けられている。

恐る恐る地面の血の跡を辿れば、道路の先まで続いている。

“ いや、言つて、大つ嫌いなのにいつ！ ”

出来れば氣絶したい。このまま、何もなかつたかのように、この氣色の悪い一連の事を忘却の彼方に捨て去りたいと香は思った。しかし、これが本物の血なら、皆本家のどちらかが大怪我を負つてゐる事になる。

恐いけれど無視もできず、意を決して香は隣の家の前に来る。半開きの扉から見える部屋の中は薄暗く、様子を窺つことはできない。

「 … くそつ … つてえ … 」

そう遠くない部屋の中で、聞き慣れた男の声がする。でもそれは、痛みを堪え喰いしばつたものの様に聞こえた。

「 祐！？」

恐怖も忘れて、思わず真っ暗な部屋の中に飛び込んだ香は、電気をつけよつとした。

しかし、その手を不意に掴まれて、壁に体を叩きつけられた。咄嗟に悲鳴を上げようとしたが、口を塞がれる。血の匂いがする

滑りとした大きな手に。

「声出すな…それから、電気点けんな」

間近で絞り出すように咳かれた言葉に、香は何度も頷く。すると口元の手はするりと離れる。

「このまま家帰れ。家中の鍵閉めて、外出るな。誰も入れるな」

相変わらずの上から口調にはむつとしたけれど、少しだけ暗闇に慣れて、ぼんやりと相手の顔を見た香は息をのむ。祐は眉間に皺をよせ、左腕を押さえながらフランフランとバスルームに向かつて歩いていく。

彼に触れた口の周りは、血なまぐさこ匂いがして、触れればぬるりとした嫌な感触。

祐が怪我をしていると、香は確信する。

「祐、どこ怪我したの？」

光の無いバスルームの前で、制服のワイシャツのボタンを外していた祐は、入り口でそう尋ねてきた相手に視線を向ける。

「堂々と覗くな、痴女」

「だ、誰が痴女よ！ 怪我の手当にするから、せつと着替えてうちに来なさいよ！」

相変わらずの相手に怒りながら、香はそう言い残してせつと自分の家に戻った。

だから香は気付かなかつた。

「ひんなもん、見せられると訳ねーだろ」

そう力なく呟いた祐の声を。

そして、壁にもたれたまま、ずるずるとへたり込んだ祐の、刃物で深く切りつけられた左腕と、その手で押さえられた右脇腹の止まらない夥しい出血に。

VISITOR 2 (前書き)

些か、描写にエグイシーンがござります。
そう言つた物が苦手な方は、ご遠慮ください。

+

それから祐が香の家に来たのは、二十分後だった。それは香が自分の顔と服に着いた祐の血を落とすのにかかった時間と、ほぼ同じだった。

「とりあえず、シチュー食わせろ」

「はあ？ 傷の手当てが先に決まってるでしょ」

やつと来たと思えば、遠慮もなく食事をたかる男に救急箱を開いて待ち構えていた香が呆れる。

「手当てしないなら、ご飯抜き

「…ひつ」

食事が絡めば主導権は何時だって香の方。

ムスッとしたまま腕を差し出した祐の肌の色が、いつもより白い気がした。傷は十センチ程度、皮膚がぱっくりと裂けている。

既に血は止まっているが、結構深い。

香はその傷に眉根を寄せ、彼の腕を取った。が、その腕の異常な冷たさに驚く。

「つめたつ！」

「水風呂浴びた。で、血も止まつた」

「…確かに血は止まつてゐるけど…病院行つた方がいいんじゃないのこれ？」

「めんどくせえ」

その一言で片づけた相手に溜め息を漏らし、念のために消毒液で傷を消毒し、ガーゼを当てて包帯を巻く。

「喧嘩でもしたの？」

「ストーカーに襲われた」

「チヤラ男だもんねえ、祐さんは」

棘のある言い回しで、口^{くち}頃の恨みを揶揄した香に、祐は鼻で笑う。

「なんだ、妬いてんのか？」

「自惚れ過ぎ。いい加減に彼女を一人に絞つてよね。とぼっちりでいい迷惑よ」

むつとした香は、包帯を結び終えた腕を軽く叩く。祐は大袈裟に痛がつて見せたあと、鼻で笑う。それは自嘲だった。

「惚れた女には何度も振られ続ける」

「へえ…あんたを振る女つているんだ。世の中、捨てたもんじゃないわ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味よ。それ、ちゃんと警察に届け出しなさいよ?」

救急箱の中に広げたものを片付けて、立ち上がりうとした香の手を、祐が握つて止める。

新手の嫌がらせかと香は思つたが、自分より高い位置から見下ろして来る幼馴染の表情が、何かを堪える様に歪む。

「あ、痛み止め欲しかつた？」

「違ひ」

憮然と呟いた祐に、香が首をかしげる。

「…あ、そう言えば、家に着く直前にあんたいだずら電話かけてきたでしょ？」

「電話？」

「そ。ケータイから。女の子使ってコロスとか言わせて「俺は電話してねえ…ってか、ストーカー女に盗まれて、奪い返すために揉めてびっくりやられたんだぞ？」

怒り混じりにさう答えた祐は、治療を終えた手を撫でる。

「それで怪我？」

「ああ。包丁振り回して、マジで殺されそうになつたから、携帯電話も奪い返せずに逃げた。しかもその女、さつき死んだし

「…は？死んだ？」

訳のわからない言葉に、香が眉根を寄せせる。

「途中、遮断機の下りた線路抜けて…追っかけて来たその女が走つてきた電車に轢かれた…即死だつて、救急隊が言つてたのを見て帰つてきた」

長い付き合いなだけに、彼が嘘を言つ時は特有の癖があるので嘘ならば香は気付けた。だが、今それを告げる彼の言葉に癖の行為は見られなかつた。

それに気付いて、香は表情を失い蒼白した顔で祐を見る。

「…た、祐…じや、じやじやじやじや、じやあ…あの電話」

オカルト物が大つ嫌いな香は、無意識に祐に縋り寄つて、言葉も上手く喋れず涙目で相手を見る。

祐の方は、険しい表情のまま泣きそつた幼馴染の頭を軽く撫でる。

「心配すんな。どうにかする」

「ど、どうにかかる…」

陰陽師や祓魔師エクソシストでもあるまいしと、言葉を続けようとした彼女の言葉は続かなかつた。

リビングの窓を破壊する激しい衝撃音で。

硝子が砕け散る音と共に、閉ざされたカーテンが風ではためく。揺らぐ隙間から覗く夜の世界に浮かび上がった物に、香は絶叫して祐にしがみつく。

「ちつ、ちつこい女だな」

恐らく人であつた物のなれの果て。

右半分の頭が原型もなく潰れ、削られ潰れて変形した顔は、二人を見てニタリと笑う。

左側に直角に九百度曲がつた首は根元で半分千切れかかり、体はぐにゃぐにゃと軟体動物のような動きですると割れたガラスの隙間から上半身を飛びこませた。

左の腕は肘からもげ、右手には血に染まつた何かを握り締め、四つん這いになつて身じろぎをする度に、その体の一部が崩れて落ちる。

「ミヤツウケタア…」

「いやあああああつ…」

電話の声とほぼ同じそれに、香が戦慄わななくと、祐が小柄な香を支えるように玄関へ向かう。

「タアスウ……クウ……」

縋るように呼ぶその声に、祐は「うぜえ」と舌打ちをする。

割れたガラスに体を突き刺す格好になつていた異形なものは、痛みも感じなければ知能も欠落したのか、自分を阻むものにも気付かずには必死で身を捩る。

遠くでサイレンの音がする。

祐は相手が動けない隙に玄関の扉を開け、足のおぼつかない香とともに外に出る。

その時、祐の耳に何とも言えない気持ちの悪い肉の千切れる音がした。同時に、ずるりと引きずるような音が聞こえる。

「逃げるぞー！」

そうはいつても、恐怖で震える香の足は上手く歩けず縛まつれ、アパート沿いの道路をしばらく歩くうちに走った所で腰が抜けて座り込んでしまう。

「香ー！立ー！」

「む、むり、ムリ、無理ー！祐だけ逃げて！」

鋭く幼馴染を呼ぶ祐の声。だが香は首を大きく横に振る。声も震え、奥歯の根すら合わない彼女に、苛立つたように祐は舌打ちする。後ろからは、這つているとは思えない速度でスプラッターな存在

が寄つて来る。

「莫迦か！置いていけるか！」

屈んだ祐は、香の体をぐつと抱きしめ、迫つて来る相手を睨む。

「いい加減諦めろっ！香に手え出してみり、お前の事なんぞ永久的に存在そのもの忘れてやる！」

そんな言葉でいいのか？と、恐怖の中でも変に冷静な思考をめぐらせた香だったが、あと数歩程度の距離にまで近付いた相手は不意に動きを止める。

「……ヤダ……ヨウ……タスク……」

思いの外、効果できめんだった言葉に、悲しげな顔を見せた元人だった存在は、祐を見つめる。香の事など眼中にないかのように。

「スウキイナアノ……ド、シイテ、ワワワワタシ……ダダダダメ？」

言葉すら満足に離せなくなっている相手を、祐もじつと見下ろす。香も恐る恐る相手を見る。グロテスクな存在になつてまで、追いかけて来る女の子。ストーカーになるくらい、祐の事が好きだったのだろうと思うと、恐いけれど憎めない気分になつてくる。

「惚れた女以外に興味はねえし、優しくもしねえ。お前だからじやねえ。初めからそつ言つた。分かつて付き合つて別れただろ

く。

刹那、恐怖も忘れて、香が人でなしな幼馴染の胸を怒り任せに叩

「あんた、女の子の気持ちなんだと思ってるの！一途に好きだつて
いう気持ち弄んで、死んじゃつてからも、いっぱい怪我しているの
に追いかけるくらいあんたの事、好きにさせといて…ちゃんと、こ
の子に謝りなさいっ！莫迦祐！」

猛抗議を受けて、祐は難しい顔をしながら呆れた様に溜め息をつくと、地面に伏せた相手を見る。

「…悪かった。片想いの辛さは分かってたのに、お前に悪い事をした…」

「ごめんなさいの「ご」の字も満足に言つた事の無い俺様男の素直な謝罪に、香は思わず目を見張る。

それは言われた本人も同じだったようで、顔の半分潰れた相手は、泣きそうな顔で笑う。

そして、握っていた右手を祐に伸ばし、そつと掌を広げる。

そこには、血に汚れてはいたけれど傷の付いていない祐の携帯電話。祐はその手からそつと自分の携帯電話を掘む。力なく手を下ろし、次に彼女は香に視線を向けた。

「…ア、アアアアリリリガガ、ガ、ガ…ト…ゴ…メ…ン…」

そう言つて、相手は完全に動かなくなつた。

しばらく一人はそのまま動けず、事前に祐が通報した警察が来るまで、ただそのまま動かなくなつた相手を見つめていた。

+

死体が動いたと世間が大騒動になつて数日が経ち、慌ただしかつた祐と香の生活も、ようやく普段と変わらなくなつた。

色々恐い目にもあつたが、一人は彼女の葬儀に出た。出棺まで見届けた後、制服姿のまま一人帰り道を歩いていた。

「あの子…死んでまであんたを追いかけるなんて、本当にあんたが好きだつたんだね…こんなろくなしなのに」

「うつせえな」

不満げに、祐が唸る。

執念かもしない。ただ好きで好きで、その一念で、心が歪んでストーカーになつて。

彼女がした行為は決して褒められることではないけれど、彼女が祐を好きだつたという気持ちを非難するつもりは香にはない。

「で、あんたの好きな子つて誰？あんたが人に優しくするなんて気持ち悪いけど、一度見てみたいわ、その相手」

「…鏡でも見る」

ぼそっと呟いた祐に、香は意味が解らないと首をかしげる。物分かりの悪い相手を引き寄せて、彼女を抱きしめる。

「な、ななな何？」

「解るか？俺の心臓、動いてないの」

何の冗談かと思ったが、そつと左胸に耳を押しあててみた香は、全く鼓動の聞こえない相手を見上げる。

そう言えども、幼馴染の顔色がずっと血色不良のままで、自分を抱きしめてくる祐に全く温もりがない事によつやく香は気がつく。

「え、い、何時から？」

「あの事件から」

「う、うそー？じや、何で動いているの？」

「…死んでも執念で生きたのは、あの女だけじゃねえって事だよ」

そう言つて、祐は香の唇に軽く口付ける。
熱の無い、冷たい口付けだった。

「俺は諦めねえ。お前を置いて逝かねえから、覚悟しろよ。」

「ヤリと不敵に笑つた相手に、香はわなわなと震える。

「いやああああつー！今すぐ成仏してえー！ファーストキスも返せえー！莫迦祐ー！」

泣きそうにならぬがら叫んだ香の声は、雲一つない空に吸い込まれるように響き渡る。

前途多難な彼女の横で、厄災を運ぶ男はただ嬉しそうに笑つた。

VISITOR 3（後書き）

本当は、一話まるっと短編で投稿したかったのですが、描写が描写なので、クッショーンを置く意味で三話に区切つてみました。ドロドロな残酷描写ではありませんが、苦手な人は不快かと思われる所以救済処置的な感じです。

どうしても作品がホラーになりきれなかつたのは、自分の背後が怖くて仕方なかつたから（笑）

閲覧いただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500y/>

VISITOR

2011年11月11日10時42分発行